

25-B-10 がん患者の外見支援に関するガイドラインの構築に向けた研究
野澤 桂子 国立がん研究センター 中央病院 アピアランス支援室

研究の分類・属性

ヘルスリサーチ

研究の概要

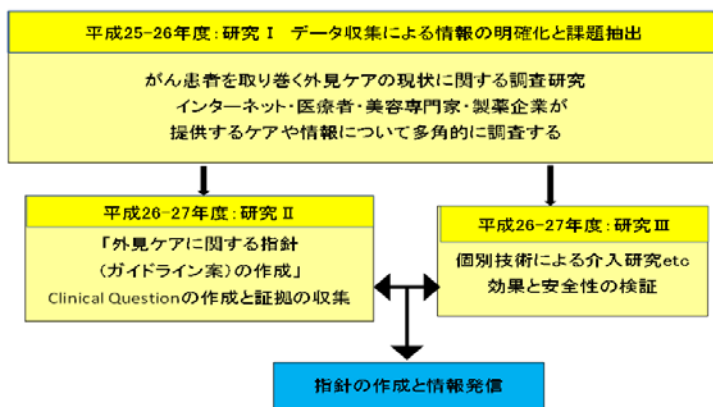
2012 年の全国がん診療連携拠点病院 397 施設を対象とした我々の調査 (回答率 71%) で、94%の施設が何らかの外見支援を行っているという回答したように、医療現場でも患者の外見の変化をサポートすることの重要性が認識され始めている。しかし、外見支援に関して提供される情報やケアは、化粧品学や医学・看護学などが学際的に関わる必要があるため、これまで十分に吟味されておらず、研究も極めて少ない。その結果、医療者のコントロールの及び難い外見に関する多くの情報は、有効性や安全性に関する科学的根拠の乏しいまま流布されている状況である。加えて、ソーシャルメディアの発達により、危険な情報の伝達が個人間で加速度的に増していることから、その情報の全体像はより不明確になっている。情報の全体像を明らかにし、患者の安全性を確保するための外見支援に関するガイドライン作成は、急務となっている。

そこで、本研究班は、「病人ではなく人として社会で生きる」という視点から、サバイバーシップ実現に不可欠な外見の問題に関して、患者の安全性を確保するための「がん患者の外見ケアに関するガイドライン」構築に向けて指針案を作成した。

そのために平成 25-26 年度は、①指針案作成の前提となる 7 つの調査研究を行い、がん患者の外見支援の現状と課題を、医療者・製薬企業・美容専門家・WEB の観点から明確にした。具体的には、4 つの質問紙調査 (全国診療連携拠点病院 396 施設の各通院治療センター・放射線診療科・理美容室、大学病院 69 施設の形成外科)、外見症状への対処方法に関するインターネット情報 (263HP) の内容分析、抗悪性腫瘍薬 (115 成分・130 剤) の添付文書の外見症状に関する記載の内容分析、一般健康人 568 名を対象としたインターネット情報に関する意識調査を実施した。その結果、患者がアクセスする外見支援に関する情報の全体像と指針案で提示すべき課題が明らかになった。

平成 26-27 年度は、②Minds「診療ガイドライン作成の手引き 2007」の手続きに則り指針案を作成した。具体的には、前年度調査で得られた知見をもとに、医学・薬学・心理学・看護学・化粧品化学などの専門家による検討を行い、必要な 50Clinical questions を明確にし、証拠の収集などの手続きを行った。この多分野の専門家 (執筆者 34 名・研究協力者 13 名・外部評価委員 8 名) の協働により初めて、医療者が行う治療行為や患者指導、情報提供において、より良い外見支援の方法を選択するための 1 つの基準を示すことが可能となった。

並行して、③重要事項にも関わらず全くエビデンスの無いものについては、可能な限り、個別技術による介入研究等として「がん患者の外見とそのケアに関する研究」を行った。すなわち、「日焼け防止材と皮膚洗浄に関する研究」「皮膚への塗布物による皮膚線量への影響に関する研究」「マニキュア除去時の有機溶剤による爪への影響とネイルケアによる効果の検証」「医療用ウィッグの認証に関する意識調査」を行い、その有効性と安全性を検証しながら、指針に反映させた。



がん患者の外見支援に関するガイドラインの構築に向けた研究

平成 27 年度研究経費

4,000 千円

研究班の組織

第3年次

研究者名	所属研究機関名・職名	分担する研究課題名・項目
野澤 桂子	国立がん研究センター中央病院アピランス支援室・室長	がん患者の外見支援に関するガイドラインの構築に向けた研究（実施及び総括）
山崎 直也	国立がん研究センター中央病院・皮膚腫瘍科 科長	がん薬物療法に伴って出現する皮膚症状の治療法開発に関する研究
角 美奈子	癌研有明病院放射線治療科副部長	放射線療法による症状の変化とそのケアに関する研究
清水 千佳子	国立がんセンター中央病院 乳腺・腫瘍内科外来・病棟医長	がん薬物療法による症状の変化とそのケアに関する研究
藤木 政英	国立がん研究センター中央病院・形成外科・医員	がん治療に伴う外見変化に対する美容外科的処置の有用性・安全性に関する研究
矢内 貴子	国立がん研究センター中央病院・薬剤師	皮膚症状に対する薬物治療の有効性に関する研究
清原 祥夫 平成26年より開始	静岡がんセンター皮膚科部長	がん薬物療法に伴って出現する皮膚障害に対する症状コントロールにおける多職種チーム医療の有効性に関する研究
平川 聡史 平成26年より開始	浜松医科大学・皮膚科学講座・准教授	がん薬物療法によって出現する皮膚障害の発症メカニズムに関する基礎的研究

水谷 仁 平成26年より開始	三重大学大学院医学系研究科臨床医学系 講座・皮膚科学教授	がん薬物療法に伴って出現する皮膚症状の マネージメントに対するエビデンスに関する 研究
菊地 克子 平成26年より開始	東北大学大学院医学系研究科・皮膚科学 講師	がん治療に伴う皮膚障害に対する化粧品 の有用性・安全性に関する研究
鈴木 公啓 平成26年より開始	東京未来大学子ども心理学部・講師	外見の変化ががん患者の心身に及ぼす影響 に関する研究
矢澤 美香子 平成26年より開始	武蔵野大学通信教育部・講師	外見の変化に対するケアががん患者の心身 に及ぼす影響に関する研究
渡辺 隆紀 平成26年より開始	仙台医療センター 乳腺外科・医長	外見に関するガイドライン・脱毛項目の統括
幸野 健 平成26年より開始	日本医科大学教授・千葉北総病院皮膚科 部長	外見に関するガイドラインの構築への指導

研究の目的と到達目標及び実績要点

全期間

(目的と到達目標)

本研究は、サバイバーシップ実現に不可欠な外見の問題に関して、「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」の作成を目的とする。

がんと外見に関する研究は、医療技術の進歩に伴ってがん患者の長期生存が可能になり、「どれだけ長く生きるか」から、「どのように生きるか」に焦点があてられて、初めて必要性の認知された分野である。それゆえ、他分野に比して歴史が浅く、不明な点も多い。近年になり、漸く、外見の変化に対する患者の苦痛や、医療的措置のみならず、美容を含めた外見のケアが患者のQOLに及ぼす影響などが数量的に研究され始めたものの、現実に患者に提供されている情報やケアに関するエビデンスは未だ僅少であり、全体像は不明である。とりわけ、美容的な外見のケアについては、化粧品学や医学、看護学などが学際的に交錯する領域であるために、十分な検証がなされてこなかった。しかし、患者が安心してQOLの高い療養生活を送ることができるよう支援するためには、外見のケアに関する現状をまとめ、有用性の高い指針案を作成することが必要である。

平成 25-26 年度は、がん患者の外見支援の現状と課題を明確にすることを目標に基礎研究を実施する。具体的には、指針案作成に不可欠な情報の収集と整理を徹底して行う。患者がアクセスしうる情報の提供源として WEB・医療者・製薬企業・美容専門家などを対象に調査を行い、外見の変化とそのケアに関する風説を含む情報を調査する。科学的根拠の乏しいまま流布されている情報やエビデンスに関する情報を含めて、治療に伴う外見の変化とそのケアに関する全体像を、多角的に明らかにすることで、がん患者の外見支援の現状と課題を明確にする。本研究により得られる外見ケアに関する網羅的なデータは、世界的にも稀有であり、患者と医療者に必要な情報を明らかにし、共通理解の臨床的基盤を作ることが可能となる。また、より明確にしなければならぬ情報を選別するだけでなく、新たなケアの方法の開発や確立につなげる研究的基盤を作ることにも可能になると考える。

平成 26-27 年度は、基礎研究で得られた知見をもとに、Minds2007 の手続きに則り、医学・薬学・心理学・化粧品化学などの専門家による検討を行い、「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」の作成を目指す。具体的には、**Clinical question** を明確にし、証拠の収集などの手続きを行う。並行して、重要事項にも関わらずエビデンスの無いものについては、個別技術による介入研究等「がん患者の外見とそのケアに関する研究」を行い、その効果と安全性を検証しながら、指針に反映させる予定である。

(3年次評価時点の実績要点)

1. 「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」作成のために、初年度は、外見支援の現状把握など基礎データの収集、2年次は、**Clinical question** の作成及び介入研究の実施、3年次は、指針案の作成完了及び普及の準備、を中心課題として積極的に取り組み、予定していた指針案が完成する見通しとなった。以下、順に要点を述べる。

2. 25-26年度は、指針案作成の前提となる7つの調査研究を行い、がん患者の外見支援の現状と課題を、「情報」という視点から初めて多角的に明らかにした。

具体的には、4つの質問紙調査（全国診療連携拠点病院396施設の各通院治療センター・放射線診療科・理美容室、大学病院69施設の形成外科）、外見症状への対処方法に関するインターネット情報（263HP）の内容分析、抗悪性腫瘍薬（115成分・130剤）の添付文書の外見症状に関する記載の内容分析、一般健康人568名を対象としたインターネット情報に関する意識調査を実施した。

情報源ごとに、外見ケアの実態解明に関する調査研究を行った結果、多くの患者が最初にアクセスするインターネットにおいて、不確実または有害な情報に晒されることや、医療者の提供する情報にも不適切なものがあることが示された。また、がん診療連携拠点病院内であっても、患者が誰に確認すればよいのか困惑する状況にあることが明らかになった。

得られた結果は、がん患者の外見支援の現状と課題を明確にし、指針案の項目作成に役立つだけでなく、今後の患者支援の充実に重要な基礎データとなり得る。

3. 平成26-27年度は、Minds「診療ガイドライン作成の手引き2007」の手続きに則り指針案を作成した。具体的には、前年度調査で得られた知見をもとに、医学・薬学・心理学・看護学・化粧品化学などの専門家による検討を行い、必要な**Clinical questions**を明確にし、証拠の収集などの手続きを行った。総説及び50項目の**Clinical questions**（治療行為編・日常整容編）が作成された。日本医学図書館協会の強力な検索協力を得て、34名の専門家が6チームに分かれて執筆や会議を行った後、チーム内レビュー、チーム間レビュー、3回の全体コンセンサス会議を経て草案を作成した。

28年1月以降、日本皮膚科学会・日本がん看護学会・日本化粧品学会・日本放射線腫瘍学会から各2名、計8名の評価委員の推薦を得て、外部評価を得る予定である。

4. 平成26-27年度は、指針案作りに並行して、重要事項にも関わらず全くエビデンスの無いものについては、可能な限り、個別技術による介入研究等として「がん患者の外見とそのケアに関する研究」を行った。すなわち、「日焼け防止材と皮膚洗浄に関する研究」「皮膚への塗布物による皮膚線量への影響に関する研究」「マニキュア除去時の有機溶剤による爪への影響とネイルケアによる効果の検証」「医療用ウィッグの認証に関する意識調査」を行い、その有効性と安全性を検証した。小規模研究ではあるが、指針案を構成するエキスパートオピニオンの合意形成に際して、有益な判断資料となった。

第3年次

(到達目標)

1 「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」の完成

平成26年度より継続して、「治療指針編」「整容的処置編」について医学・薬学・心理学・看護学・化粧品化学などの専門家による検討を行い、「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」を完成させる。

本指針は、多分野の協働が不可欠なため、コンセンサスの形成に際して、とりわけ、以下の点に配慮する。

- 各専門領域のグループ内での調整後、他分野の専門家による評価
- 外部識者や関連学会・団体、患者による評価

2 「がん患者の外見とそのケアに関する研究」の継続

平成26年度に開始した「マニキュア除去時の有機溶剤による爪への影響とネイルケアによる効果の検証」研究をまとめる。さらに、患者にとって重要事項にも関わらずエビデンスの無いものについては、エキスパートオピニオンの判断にも資するよう、可能な限り引き続き調査を行う。

3 臨床活動に貢献する研究成果の公表

本研究班は、患者が「社会に生きる」ことを支援するため「患者の外見ケアに関する指針の作成研究」をメインに、その前提となる「がん患者を取り巻く外見ケアの現状に関する調査研究」や個

別技術を用いた「がん患者の外見とそのケアに関する研究」を実施してきた。そこで得られた知見は、直ちに日常臨床に還元できるものであるとともに、今後の患者支援の基盤整備を考えるにあたり基礎資料となり得るものである。

最終年度として、研究終了後の書籍化を予定しているが、将来的には、成果物を電子媒体で公表する予定である。

(年次評価時点の実績要点)

1 「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」の完成

平成27年度は、26年度より継続して、Minds2007の手続きに則り、指針案（治療指針編・整容的処置編）の作成を進め、総説及び50項目のClinical questionsが作成された。日本医学図書館協会の強力な検索協力を得て、34名の専門家が6チームに分かれて執筆や会議を行った後、チーム内レビュー、チーム間レビュー、3回の全体コンセンサス会議を経て草案を作成した。その後、日本皮膚科学会・日本がん看護学会・日本放射線腫瘍学会・日本化粧品学会に各2名、計8名の外部評価委員の推薦を依頼した。

2 「マニキュア除去時の有機溶剤による爪への影響とネイルケアによる効果の検証」の解析

化粧品会社（株式会社コーサー）の研究所の協力を得て、有機溶剤の種類による爪甲（4名：24指）への影響を1か月間追跡し、電子顕微鏡で検証したところ、差違は認められなかった。がん患者へのネイル指導として「ノンアセトンの除光液を使う」などと記載された冊子が配布されることが多いが、根拠の無い可能性が示唆された。本実験の結果は、指針案のエキスパートオピニオンの判断の際に生かされた。

3 「医療用ウィッグの認証に関する意識調査」の実施

平成27年4月に医療用ウィッグに関するJISが制定された。指針案にどの程度反映させるべきか否かについて判断するため、全国の拠点病院の医療従事者200名に対する質問紙調査やウィッグメーカー3社に対するヒアリングを行った。その結果、今回は、時期尚早であると判断された。

4 臨床活動に貢献する研究成果の公表

医療者に向けて、平成28年7月に金原出版より「アピアランスケアに関する手引き」が上梓される予定である。また、患者に向けて、本研究で得られた内容を、現在作成中の「若年がん患者向けアピアランスケア無料配布冊子」のQ&Aに反映させる予定である。

これらを通じて、医療者に正しい知識と伝えるとともに、外見が最も気になるAYA世代へのサポートを充実させることが可能になる。

研究成果と考察

第3年次評価時点

(1) がん患者の外見ケアに関する指針の作成研究

平成27年度は、26年度より継続して、「がん患者の外見ケアに関するガイドライン（指針案）」の作成を進め、最終的に総説及び50項目のClinical questionsが作成された。日本医学図書館協会の強力な検索協力を得て、34名の専門家が6チームに分かれて執筆を行った後、チーム内レビュー、チーム間レビュー、3回の全体コンセンサス会議を経て草案を作成した。28年1月以降、日本皮膚科学会・日本がん看護学会・日本化粧品学会・日本放射線腫瘍学会から各2名、計8名の外部評価委員の推薦を得て評価を得る予定である。

【27年度の作成プロセス】

①執筆&チーム内ピアレビュー：26年10月-27年8月

各執筆者個人による執筆後、カテゴリーごとの執筆チーム内で、ピアレビューを行った。チームは、化学療法・分子標的治療・放射線治療・脱毛・爪・日常整容の6カテゴリーである。とりわけ、日常整容行為に関しては、エビデンスの少ない中、チーム内コンセンサスを得るために議論を重ね、4月・5月・8月2回（1回は合宿で終日）4回の合議を行った。

なお、執筆および合議のプロセスの中で、CQ項目を大項目50項に整理し、関連項目を小項目として含めた。執筆者は8名増え、34名となった。

②チーム間ピアレビュー：27年9月

エビデンスレベルの分類・検証として、皮膚科医・腫瘍内科医・乳腺科医・心理学者・化粧品学者・看護学者などの多職種による執筆のため、異なる分野ごとにチーム間で原稿を交換してレビューを行った。

③推奨の決定：全体コンセンサス会議 27年9-28年1月

チーム内レビュー及びチーム間レビューを終了した項目について、全体コンセンサス会議を開催し、推奨度を決定した。

9月・10月・1月、全体班会議を開催し、検討が持ち越された項目については、全員の評定及びコメントを郵送（またはメール）にて回収し、評決とした。

④4 学会推薦の委員による外部評価、患者意見の反映：27年1月-28年3月予定

日本皮膚科学会，日本化粧品学会，日本がん看護学会，日本放射線腫瘍学会から各2名，計8名の外部評価委員の推薦を経て，AGREE IIによる評価を得た後，その指摘事項をもとに，さらに手引きを修正し，全体の質の向上を図る予定である。

また，患者の意見を反映するため，美容ジャーナリストの山崎多賀子氏，若年性癌患者団体「STAND UP」の役員の岸田徹氏に全体コンセンサス会議に同席いただき，意見を反映した。

⑤公開：28年7月頃

医療者向けの「アピアランスケアに関する手引き」として，金原出版より上梓予定である。

並行して若年がん患者向け「アピアランスケア」冊子のQ&Aにも内容を反映させる予定である。

【Clinical question】

本報告書末尾に，具体的な記述例として「資料2：再発毛の促進や脱毛予防にミノキシジルは有効か」「資料3：化学療法による皮膚乾燥に対して，安全な日常的スキンケア方法は何か」を添付する。

—治療指針編—

化学療法

総論	化学療法 総論	-
1	脱毛の予防や重症度の軽減に頭皮冷却は有用か	C1a
2	再発毛の促進や脱毛予防にミノキシジルは有用か	C1a, C2
3	再発毛の促進にビマトプロスト (Bimatoprost, 商品名：グラッシュビスタ) は有用か	C1b
4	がん化学療法に起因した脱毛にウィッグは有用か	C1a
5	化学療法による手足症候群に対する治療としてステロイド外用は有用か	C1b
6	化学療法による手足症候群に対して保湿薬の外用は有用か	C1a, C1b
7	化学療法による手足症候群に対する予防としてビタミン B6 内服は有用か	C2
8	化学療法による皮膚色素沈着に対する予防としてビタミン C 内服は有用か	C2
9	化学療法による皮膚色素沈着に対する治療としてビタミン C 内服は有用か	C2
10	化学療法による皮膚色素沈着に対する予防としてトラネキサム酸内服は有用か	C2
11	化学療法による皮膚色素沈着に対して，ハイドロキノンの使用は有用か	C2
12	タキサン系薬剤による爪変化に対する予防として冷却手袋は有用か	C1b

分子標的治療

総論	分子標的治療 総論	-
1	手足症候群に保湿剤の外用は有用か	B
2	手足症候群に副腎皮質ステロイド薬の外用は有用か	C1a
3	手足症候群に創傷被覆材は有用か	C1a
4	分子標的治療に伴うざ瘡様皮疹に対して副腎皮質ステロイド薬の外用は有用か	C1a
5	ざ瘡様皮疹に抗菌薬の外用は有用か	C1a
6	ざ瘡様皮疹に保湿剤の外用は有用か	C1b
7	ざ瘡様皮疹にアダパレンの外用は有用か	C1b
8	8-1 ざ瘡様皮疹の予防にテトラサイクリン系薬剤の内服は有用か	B
	8-2 ざ瘡様皮疹の治療にテトラサイクリン系薬剤の内服は有用か	C1b
9	ざ瘡様皮疹に抗菌薬 (マクロライド) の内服は有用か	C1b, C2
10	皮膚乾燥 (乾皮症) に副腎皮質ステロイド薬の外用は有用か	C1a

- 11 皮膚乾燥（乾皮症）に保湿薬の外用は有用か C1a
- 12 痒痒を伴う乾皮症に抗ヒスタミン薬内服は有用か C1a
- 13 分子標的薬治療に伴う爪囲炎に対して推奨される局所治療はあるか C1b, C1b, C1b, C2, C1b

放射線治療

- 総論 放射線治療 総論 -
- 1 頭頸部領域以外の放射線皮膚炎に対してステロイド外用療法は有効か C1a
 - 2 頭頸部領域の放射線性皮膚炎に対して外用ステロイド外用薬は有用か C1b
 - 3 頭頸部領域以外の放射線治療による皮膚有害反応に保湿は有用か B
 - 4 頭頸部領域の放射線皮膚炎（70Gr相当）に対する保湿は有用か C1a
 - 5 放射線皮膚炎の軽減に洗浄の禁止は有効か B
 - 6 放射線治療中は制汗剤などのデオドラント使用継続は禁止されるか B
 - 7 放射線による遅発性皮膚有害反応の毛細血管拡張症に対するレーザー治療は有用か C1b

—整容的処置指針編—

日常整容行為

- 総論 日常整容 総論 -
- 1 化学療法による皮膚乾燥に対して、安全な日常的スキンケア方法は何か
C1b, C2, C1a, C1a, C1a, C1b
 - 2 分子標的薬治療によるざ瘡様皮疹に対して、安全な日常的スキンケア方法は何か
C1b, C2, C1a, C1a, C1b
 - 3 放射線治療による皮膚障害に対して、安全な日常的スキンケア方法は何か B, C1b, C1b
 - 4 分子標的薬治療している患者に対し、安全なひげそり方法および顔そり方法は何か
C1a, C1a, C1a
 - 5 抗がん剤治療中の患者に対して勧められる紫外線防御方法は何か C1a, C1a, C1a, C1a, C1a, C1a
 - 6 がん治療に伴う皮膚障害をカモフラージュとしてメイクアップは有用か C1a, C1a
 - 7 7-1 手術瘢痕をカモフラージュする方法としてテーピングは有用か C1a
 - 7-2 手術瘢痕をカモフラージュする方法としてメイクアップは有用か C1a"
 - 8 化学療法中の患者に対して、安全な洗髪等の日常ヘアケア方法は何か C1b, C1a
 - 9 化学療法終了後再発毛し始めた患者に対して、縮毛矯正（ストレートパーマ）は施術してもよいか
C1b, C1b
 - 10 化学療法終了後に再発毛し始めた患者や脱毛を起こさない化学療法を施行中の患者は、染毛してもよいか
C1b, C1b, C1b
 - 11 化学療法による眉毛の脱毛に対してアートメイクは有用か C1b
 - 12 化学療法によるまつ毛の脱毛を安全にカモフラージュする方法として、つけまつ毛・まつ毛エクステンションは有用か
C1b, C2
 - 13 化学療法に伴う爪の脆さに対して、安全な爪の日常ケア方法は何か C1a, C1a, C1a
 - 14 化学療法中の爪の変色に対して、安全なカモフラージュ方法は何か C1a
 - 15 化学療法中に伴う爪の変形に対して、安全な爪のカモフラージュは何か D, C1b
 - 16 がん治療に伴う外見変化に対する心理・社会的介入は、QOLの維持・向上に有用か C1a

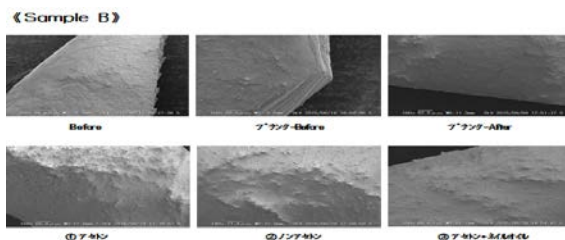
(2) がん患者の外見とそのケアに関する研究：平成26-27年度

平成26年に引き続き、以下の2研究を行い、指針案作成に際して参考にした。

①「マニキュア除去時の有機溶剤による爪への影響とネイルケアによる効果の検証」研究

化粧品会社（株式会社コーセー）の研究所の協力を得て、有機溶剤の種類による爪甲（4名：人差し指・中指・薬指の24指）への影響を比較するため、各種条件を統制した上で1週間ごとにマニキュアを塗り替え、計4週間にわたる連用試験を行った。比較評価は、各条件で爪先を採取し、導電染色を行い観察資料を作成の上、電子顕微鏡で爪甲部の形状の観察を行ったところ、実験開始の前後で差違は認められなかった（例：下図）。がん患者へのネイル指導として「ノンアセトンの除光液を使う」

などと記載された冊子が配布されることが多いが、根拠の無い可能性が示唆された。本実験の結果は、指針案のエキスパートオピニオンの判断の際に生かされた。



② 「医療用ウィッグに関する意識調査」とヒアリング

平成 27 年 4 月に医療用ウィッグに関する J I S が制定された。指針案に反映させるべきか否かについて判断するため、27 年 10・11 月、全国の拠点病院の医療従事者を対象としたアピアランスケアの研修会において、183 名に対する質問紙調査を行ったところ、85% が知らなかった。

ウィッグメーカー 3 社に対するヒアリングを行ったところ、組合に加入し審査を希望した製品のみが M・wig の対象となり、流通する全ての製品が審査の対象になるわけではないこと、また審査費用がコストに反映するため、比較的高い医療用ウィッグに M・wig の認証が出されていることなどが明らかになった。このような現状にかんがみると、医療用ウィッグのみを勧めるのは、患者の選択の幅をいわずに狭めてしまう危険があることが示唆された。

倫理面への配慮

本研究では一部、患者および医療者に対して質問紙調査を行うことを計画しており、「疫学研究の倫理指針」など該当する倫理指針を遵守し、必要に応じて倫理審査委員会の審査・承認を得て研究を開始する。具体的な患者の個人情報を利用する必要が生じた際には、患者本人に研究内容について説明し、文書によりインフォームド・コンセントを取得する。またホームページ上にアウトカムを公表する際には、公開情報の倫理性について、専門家と十分な検討を行う。

本研究に関連する、本研究期間中の主な発表論文等

第 3 年次

がん研究開発費による成果としての記載があるもの（2015 年 4 月 1 日以降）

（学会発表）

1. 野澤桂子・今野裕之

外見関連の情報提供を中心とした患者支援プログラムの有用性に関する研究
第 53 回日本癌治療学会学術集会：2015

2. 野澤桂子・茅野修史・藤木政英・矢澤美香子・鈴木公啓

がん切除による外見変化に伴う治療を補完する方法～全国の大学病院形成外科を対象として～
第 58 回日本形成外科学会総会・学術集会 学会発表：2015

がん研究開発費による成果としての記載はないが、関連するもの（2015 年 4 月 1 日以降）

（学会発表）

1. 富田真紀子・野澤桂子・藤間勝子・高橋都

男性がん患者の外見変化に伴う苦痛と情報・支援ニーズ
第 53 回日本癌治療学会学術集会：2015

2. 野澤桂子・藤間勝子・清水千佳子・飯野京子

化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造
第 69 回 国立病院総合医学会シンポジウム：2015

3. 平川聡史・高久康春・太田 勲・石井大佑・針山孝彦

4. 川端博子・勝本菜月・山本直佳・野澤桂子
がん治療の脱毛時に使用するウィッグに関する研究 ―購買行動と着用実態の視点から―
日本繊維製品消費科学会: 2015
5. 高橋恵理子・矢澤美香子・鈴木公啓・野澤桂子
がん治療による外見変化と、心理的および医学的介入が患者の心理社会的機能に及ぼす影響に関するシステマティックレビュー第13回日本臨床腫瘍学会: 2015
6. 菊地克子・志藤光介・深瀬耕二・相場節也
ケミカルピーリングでの治療を試みたパニツムマブによる痤瘡様皮膚炎の1例.
第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会(長崎市): 2015
7. 菊地克子・野澤桂子・山崎直也・中井康雄・大江裕一郎・朴 成一・高橋恵理子・井上 彰・高橋雅信・森 隆弘・田口 修・井上靖浩・水谷 仁
分子標的治療薬による爪周囲皮膚症状の定量的評価 第53回日本癌治療学会学術集会(京都市): 2015
8. 木戸彩恵・荒川歩・鈴木公啓・矢澤美香子 (2015) 発達における着衣の変遷とその変容 日本心理学会第79回大会
9. SUZUKI, T. & NAKAI, Y. (2015). Study on the body image of eating disorders with a new figure rating scale: Japanese Body Silhouette Scale Type-I. EDRS 2015, the XXIst Annual Meeting of the Eating Disorders Research S
10. Yamazaki N, Kiyohara Y, Kudoh S, Seki A, Fukuoka M.
Optimal strength and timing of steroids in the management of erlotinib-related skin toxicities in a post-marketing surveillance study (POLARSTAR) of 9909 non-small-cell lung cancer patients. nt J Clin Oncol. 2015 Oct 26. [Epub ahead of print]